

市川橋遺跡第七次調査出土の漆紙文書について

国立歴史民俗博物館

平川 南

一、釈文

者 土 □

〔佐カ〕

□者

番

〔結カ〕

□

〔前カ〕

□

二、形状

漆塗りの作業として漆桶から漆をとり分けてパレットとして使用した土器の中の漆液にふた紙をしたものが、そのまま硬化したため、土器ごと棄てられたと考えられる。

現状は原形の半分強にあたる部分が遺存したと考えられ、漆紙の大きさは約六×八センチメートルをはかる。漆紙面は若干波打った状態で、発見時の状態では、墨痕は赤外線テレビカメラを使用しても二文字ほどがうすく確認できるにすぎない（図版A）。

三、文書解読作業の工程

墨痕は全体的に不鮮明ではあるが、周縁の一部で墨痕がわずかに鮮明に確認できる。このことから文字の遺存状態について二つの可能性が想定できる。

一つは全体的に表面が風化されて墨痕が失われている場合である。もう一つは表面に砂粒等が付着して文字を覆ってしまっているために文字が鮮明にみえない場合である。後者の場合は、おそらく漆に密着させてふた紙をした際に紙の表面に漆が滲みでて、そのまま乾ききらないうちに廃棄したために、表面に砂粒等が付着したものと推測できる。

結局、漆紙をよく観察すると表面に砂粒等が付着し、ざらついた状態となっていることから、後者の可能性が高いと判断した。

そこで付着した砂粒等を除去することにした。幸い、土器と漆が堅牢な状態であるので、メスを用いて砂粒等を削り取ることができた。その結果、図版Bでわかるように、文字は肉眼でも判読可能なくらいに鮮明にみえる状態となったのである。

この作業はビデオに収めながら慎重に実施した。こうした作業を実施するためには、漆紙の状態を十分に観察した上、その作業工程を克明に記録しながら行わなければならない。とくに砂粒等を除去するといつても、漆で固められた状態であるので、かなりの力を加えないと除去できない。したがって、漆紙そのものが安定した（堅牢）状態でないと削り取り作業は困難である。また漆の溶剤がない現状では、物理的に長時間かけてメス等で削り取るほかに、よい方法はないようである。



図① 多賀城跡第24次
調査出土木簡実測図



四、文書内容

現状では三行、六文字と(図版C)、「番」の右わきにおそらく追筆と思われる「□者」の二文字(図版D)、合わせて八字(図版C)を確認できる。行間は約一・六センチ、一文字の大きさは本文約一・六センチ、追筆約〇・七センチである。

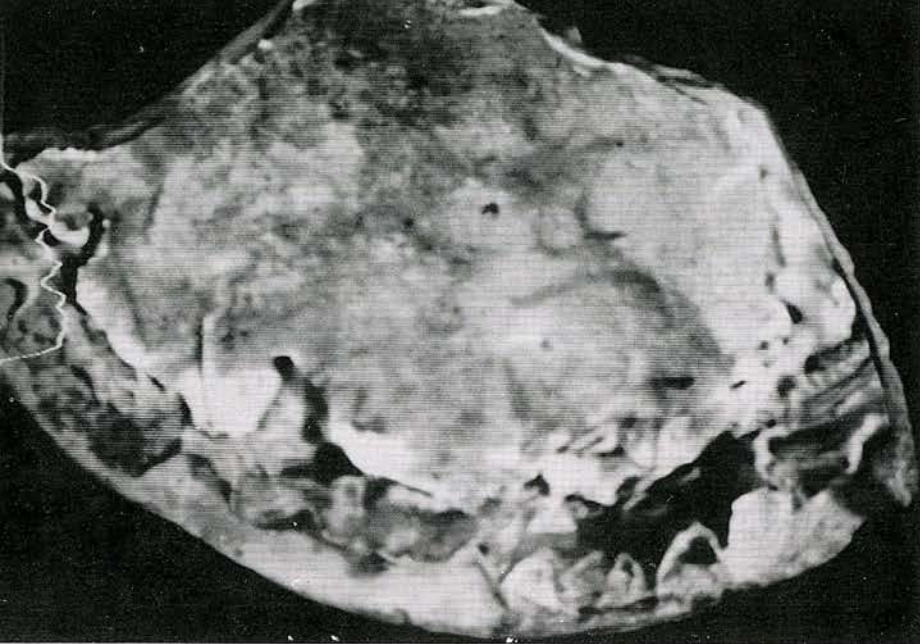
文字の大きさからも、戸籍・計帳をはじめとする帳簿類ではなく、通常の文書と判断できるであろう。

数文字しか遺存していないので、文書の内容を知るまでにいたらない。ここでは若干の解説を加えるにとどめたい。

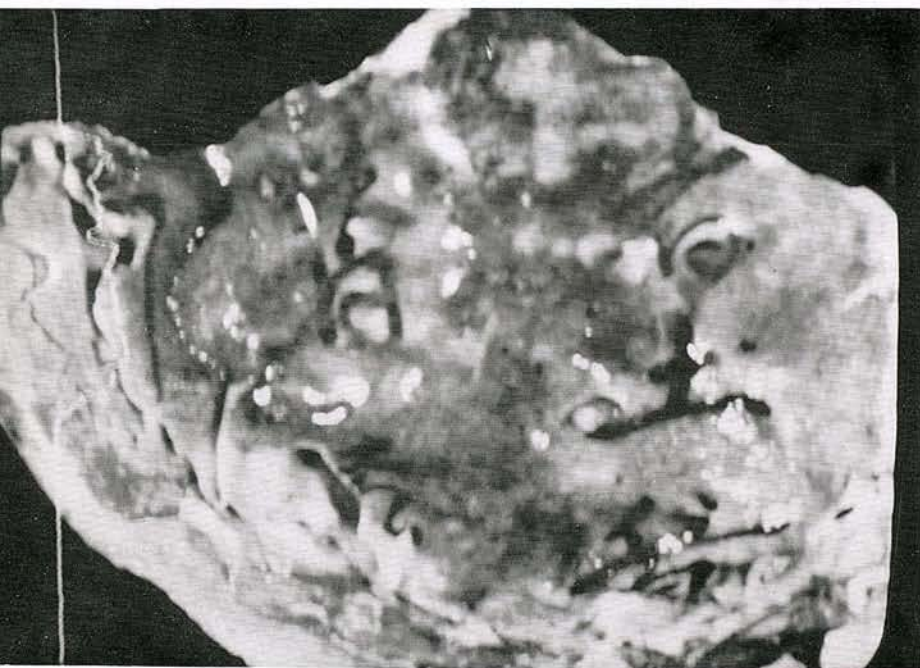
やわらかみのあるのびやかな書体である。一行目の「土」(図版E)は字形は「土」となっているが、「土」(写真では右わきに点のようなものがみえるが、これは欠損した部分である)とはないので、「土」と判読してよいのではないか。同様の例は、多賀城跡第二四次調査(外郭東南隅地区)^(註)出土の木簡(図1)に「兵土」と記したものがある。二行目の「番」(図版F)の次の文字は旁は明らかに「吉」で(図版G)、「結番」などを連想すれば「結」も考えられよう。三行目の一文字は一応「前」としたが(図版H)、上部を欠いているので、カンムリが付けば、「箭」となる場合もありえるであろう。

このようにみると、「番」や「土」などの文字からは、軍事関係文書の可能性が考えられるが、これだけの文字ではやはり不明としておくべきであろう。

(註)『宮城県多賀城跡調査研究所年報』一九七四 宮城県多賀城跡調査研究所(一九七五)



图版A



图版B



图版C

图版D



图版E



图版F





图版G



图版H